

ティ、カーニヴァルの企画が豊富である。私個人は、子ども達との生活が中心で、大人のそうした社交の場に出たことはないのだが、毎年の楽しみにしている人々も多い。子ども達のカーニヴァルもさかんである。それぞれ趣向をこらした仮装で、にぎやかに楽しむ。クラスで勢揃いした写真を見る時、ファンタジーの世界の満足気な主人公達の背後に、そのアイデアと技術を読み取ろうとする意識が今でもふと働いてしまうのは、子ども達のイメージを具現するのに悩む経験をしたせいだろう。

暗くて寒く、長いブラハの冬を、人々は積極的に明る

く楽しくくらす。その知恵とエネルギーには、感心してしまう。敵しい自然条件に頭を下げる忍耐強さばかりではない。それにもかかわらず、人々に共通している願いは、春の到来を待つこと、太陽の輝きの中に身を置くことである。太陽が雲の切れ間に現れると、人々は足をとめ、コートのボタンをはずす。それから顔を太陽に向けて目をつぶったまま、じっと佇んでいる。こうした光景もまた、ブラハの冬のくらしの一つである。

(ブラハ在住)

言語障害の臨床研究ノート(6) 終章

国際化のうねりの中で

村上 敏子

I 個として

先日出席した会合で、星野富弘さんの詩が美しい英語で朗読され、星野さんの原作を日本語で読んだ時と同様に心を揺り動かされた。星野さんの詩や散文は、いつも私の心に小さな震源のような感動を呼びおこす。

実は、私も星野さんの詩や散文を朗読することがある。しかしそれは、教材としてであり、患者さんと共にである。

私のところでは、病気や事故による脳の損傷のために言語障害をおこしたおとなの方々も言語の再学習に励まれている。高齢化社会を反映してか、最近では、言語発達の途上で問題になる言語障害を持つ子ども達よりも、言語機能がいったん完成した後言語障害をおこした60〜80歳台の方々にお会いすることの方が多くなってきている。

言語の再学習は、幼児期の言語発達の道筋に沿って行うので、言語障害が重度な場合は語彙を増やしたり、文構成力をつけたりする指導が中心になるが、言語能力が

比較的良く保存されている患者さんの場合には、ことばを楽しんでもらおうと思い、星野富弘さんや谷川俊太郎さんの作品を朗読したり、安野光雅さんの絵本に文章をつけて世界で唯一の作品を作ったりしている。また、病院の所在地である福岡県久留米市に住んでいる人が多いので、福岡県や久留米市から発行される公報誌も私にとっては、教材という宝の山である。

「このような使い方もできる」と、はっと気づくことも時々ある。同じ教材でも、私の狙いに合わせて異なった使い方ができる。おとなの患者さんは、性別・年齢・教育歴・生活歴・家庭環境が複雑に絡み合った個人史とそれに裏打ちされた言語世界を本来持っていたはずである。更に、言語障害の状態も、脳の損傷部位や広がりによって、一人一人異なっているのだから、教材は一人一人について考えなければならないし、同じ教材を使うにしても達成目標は微妙に異なる。

コミュニケーション能力を高めるために応用編としてグループでゲームをしたりする指導もあるが、基本的に

は言語治療は対一で行うものである。

もちろん、言語障害をタイプによって分類することはできるし、指導法の類似性はある。しかし、目標の設定と教材の選定は、「Aさん」という具体的な一人の人物を思い描きつつ行われるべきものである。

このように考えると、一人一人の人間のありようを良くとらえる能力が、言語治療の臨床に関わる者に必須の資質ではないか、とさえ思えてくる。感受性の強い人が経験を重ねていけば、間違いなく優れた臨床家になるであらう。

言語障害の臨床は、一人の人間としての生活史を背負った人と向き合うことなので、私には重たく、かなりの気力を必要とする。そこで私は、体力と気力を充実させるためにおそらく稀な程に規則正しい生活をしているのではないかと思う。十分に睡眠をとり、爽やかな気分で、かつ、気力を充実させていて、初めて、患者さんが、そこから何か得て帰るものがあるような臨床場面を作り出すことができるように思う。

かなりの緊張を強いる仕事であることが、一方で私の家庭での仕事を充実させている。味噌やママレード等の保存食を作ったり、草むしりや野菜の種まき等の庭仕事をすると、気分転換が、各々一つのまとまった仕事として完成されていく。通勤の途中、バス停までの道程で空き缶を拾うことも、狩猟本能が満足させられるのか楽しんでやっている。

このような日常生活での喜びがなければ、私には、臨床場面は到底支えきれないだろう。

このように、言語障害の臨床とは、深く個人に関する仕事であるので、国際化のうねりの影響を受けない所に深く沈んだもののようにも思えるが、実は国際化と個人の問題とは、深く関わりがあることに、私は最近気づいた。

II 多様性の中で

車椅子で移動されるある若い男性が、「障害者も海外へ施設見学等に行くだけでなく、気軽に遊びに行こ

う。」と呼びかけており、本人も既に何度も海外旅行をした経験があることがM新聞に紹介されていた。

好ましくないというニュアンスの込められた「海外旅行ブーム」という言い方をする人もいるが、私は、特にこのような記事を読んだ後は、可能であれば、誰でもどこへでもどんどん出掛けて行って、気候の違い、はえている植物の違い、飛んでいる小鳥の種類の違い、生活の違いに直接出くわすことには深い意義があると思う。

もちろん、旅行から帰って来た若い人が、買い物に終始し、余り見たり考えたりして来なかつた様子である時には、いささかげんなりした気持ちになることは否定できない。

「おみやげ」という商品の背後には、製造した人、販売した人など、さまざまな人が見えるはずである。外国の珍しい産物を前にして、そのものの由来や、関わった人達の生活に思いを馳せることなく、物だけを買うとしたら、おみやげとはとても貧しく寂しいものではないか。

しかし、どのような人であっても、何も感じずに帰って来たはずはないと私は期待したい。「世の中にはいろんな事があるものだ」と感じる事があつたのであれば、それで十分に旅行の収穫はあつたと言えよう。

人が他の人を受け入れられない時、「自分とは違う」ということが理由になつていふことが多いように思う。同じタイプの女性でいつも一緒に行動し、他を入れないということが実際にあるようだが、このような行動は、女性が個として自立することを妨げているようで残念に思う。何かにつけて「同じなのだ」と確認し合う安心感で結びついているために、表情や話し方まで似るのは不気味な程であるが、いったん異なつた境遇に立つと、ほとんどつき合わなくなるものらしい。

だが、自分とは違つたものに出会い、時には格闘し、互いに折り合つていくために、あるいは納得するものがある、自分を変えていくことこそ「成長」というのではなからうか。この種の成長ならば、私のような40歳台の者にも許されていることであり、生きる上で最も輝か

しい喜びのように思う。

「カルチャー・ショック」とは、最近、よく見たり聞いたりするようになったことばであるが、自分が慣れ親しんできた文化とは異なった文化に出会うことによつて、あたり前のこととして享受して来たものの有難さを確認することもあろうし、異なったありようを是認し、うまづきあつていくすべも身につけていくのではないだろうか。

異なったものを良く認識することは、自分の置かれた位置、ありようを客観視する作業でもある。

このように考えると、異文化体験を余儀なくする国際化とは、実は外へ向かうだけでなく、個へと深く内に向かうことを同時に意味する。

文部省の招きで、オーストラリアから日本に来たばかりの男性が、「日本で生活するようになって、驚くことは、一家の外に出ると日本人ばかりであるということだ。自分の国ではいつも周囲にいろんな人がいる。」と
言っていた。もちろん、日本にもアイヌ民族の文化も琉

球文化もあるのだが、移民が盛んに行われた国と比較すると、単一民族・単一言語・単一文化の国に見えるのであろう。

また、日本人自身、「日本は単一文化の国だ」と語る人も多い。単一文化の国という意識が強い中では、「同じである」ということが至上のことであり、安心なことであるだろう。「異なっている」ことは、はみ出していることを意味する。

そこで、ものごとの善悪を判断する力よりも、一緒に足並みを揃えることの方が重んじられることになりがち



である。人と話を合わせることにきゅうきゅうとしている人を見るのは愉快なことではないが、あながち個人のせいではないのであろう。

しかし、多様な文化の共存する社会では、自分が今話している相手とは異なっている点があることに気づいても、「単一」を至上とする社会にいる場合よりは比較的平気でいられるのではないだろうか。

会合の席で、カナダ人女性、オーストラリア人男性からそれぞれの国で *multi-culturalism* が政策としてとられていることを聞いた。もちろん両国では、現在も移民が盛んに行われているという事情によるものであろうし、先住民の問題は必ずしもうまく行っていないということわりつきではあったが、国際化と固有の文化の尊重という政策には、個々の人間の存在を肯定する優しさがあるように感じる。

やはりこれも、オーストラリアから来日して、一年間滞在した女性から聞いた話である。彼女は「日豪新聞」という日本語新聞をオーストラリアで創刊した日本人男

性を夫とする小学校教師であった。

彼女の話によると、オーストラリアでは、政策によって一切の差別が禁じられているので、彼女のクラスには盲の子どもも、補聴器をつけた子どもも、車椅子の子どももいる。しかし、政府は助手を雇うお金はくれないので、慣れる迄の最初の三ヶ月間は大変だったという。

当時の私は日本で余り報道されていない国の政策や経済事情を全くと言ってよい程知らなかったが、ある程度の手助けがあれば、いろんな子どもが、同じ学級で学べる可能性が広がることを知った。

オーストラリアの小学校教師の話聞いたちようどその頃、福岡県では一人の盲の中学生が県立普通高校進学を希望し、点字で受験させて欲しいと願いだしたが、通常の試験が行われたので合格せず、茨城県にある筑波大学付属盲学校に入学する、ということが起こっていた。

私はそのことは新聞の記事を通して知っているのみであったが、普通高校入学後に備えて点字奉仕をするボランティアも確保してからの申し出であったので、点字で

の試験を受けて合格した場合には、普通高校の授業についていけたらうにと、彼がチャンスを与えられなかったことを残念に思った。

当然、オーストラリアの小学校の話からその出来事へと話が広がった。私は、そのことについては未だ他の人の意見を聞く機会がなかったので、どのような意見が出されるか興味津々であった。しかし、聞かれたのは、「ハندیキヤップを持つ子どもを普通学級に入れることは本人のためにも良くない」「子どもが望んでいるわけではなく、親がそうさせたいのだ」という意見であった。

クラブ活動で化学の実験をしていて失明した高校生がいた。新聞でその記事を読んだ数年後、私は職場でその青年と頻繁に会うことになった。彼は、私の同僚の許で歩行訓練を受け、点字を学んでいた。そして数年後、彼は在学中の志望校は京都大学であったのを地元九州大学に変更し、合格したのである。

私は、彼の合格を報じる新聞を前に歓喜に包まれていた。彼を祝福し、点字奉仕の人々に感謝したいと思っ

た。

彼の例は、ボランティアを確保すればハندیキヤップを持つ人々の可能性が広がっていく確かな証である。

異なった者を受け入れることに緊張し拒絶する前に、ボランティアを募る、更には育てることから始めたら、心の持ちようも学校のありようも随分と変わるように思う。

III 終章

この一年間、私の仕事の都合で隔月であったが、「言語障害の臨床研究ノート」を書かせて戴いた。

連載が進むにつれて、学会発表では決して表に出ることのない私的な思いの部分が多く書いたかと思う。

この連載で書いてきたことは毎回異なっているようには見えても、私が読んで下さる方に伝えたかったことは、実は、唯ひとつのことではなかったのかと自分で省みて考える。

それは、自分とは異なった存在を許し受け入れること

が、コミュニケーションの原点ではないかということである。自分と異なったものに心を開いて向き合って初めて、自分自身も育つのではないかということである。

しかし、これは気持ちの持ち方を変えろという心情的なレベルにとどまるのではなく、具体的な方法に助けられるとずっと行いやすくなることだと思う。

たとえば、点字や手話等を取得する人が増えて、ハンディキャップを持つ人々と健常者との接点を増やしていけば、お互いのコミュニケーションはずっととり易くなるだろう。ハンディキャップを持つ人々もそのような特徴・個性を持つ人という風に見なされ、福祉センター等の特定の場所でのみ出会う人ではなく、日常生活の中で私達が頻繁に出会う近しい存在になるのではないか。

手助けをする方法を知らないがために、ハンディキャップを持つ人に接することが苦痛だということは、心優しい人ほど強く感じるのかもしれない。手助けをする技術を持つことや、コミュニケーションの方法を見つけて身につけることは、不必要な不安を取り除いてくれる。

テレビ番組の「セサミ・ストリート」には、指揮者の小澤征爾や歌手のポール・サイモン、女優のキャスリン・ターナー等も登場して、教育番組に対する一般の人々の理解と協力が伺えて嬉しい。この春に私がこの番組を見始めてから、手話を使う聾の女性が既に三回登場した。

二回目の登場では、妊娠した友人がドブプレーを通して聞こえる胎児の心音のリズムに合わせて指で拍子をとって、聾の女性にも胎児の様子を伝え、喜びを分かち合っていた。ハンディキャップを持つ人との接点を見出すことを、きわめてあたり前のこととして扱う制作者の見識に頭が下がった。

三回目は、その女性は図書館の司書として仕事をしてきた。

日本では、聾者の職業は一般的に言っている範囲に限られがちである。しかし、文字による言語学習がきちんとなされている場合には、内言語は高い水準にまで発達しており、深く思考する力も獲得されているはずであ

るから、今後職業選択の範囲はもっと広げられて当然なのだ。

言語障害の臨床と研究に携わる者の存在意義は、セサミ・ストリートが具体的に示してくれたように、言語障害を持つ人々がより良い日常生活を送れるように、心情のレベルのみにとどまらず、方法論のレベルで手助けをすることである。

言語の二大機能は思考の媒介であることと、コミュニケーション手段であることなので、言語機能を高めて思考力をつけ、言語障害が完全に治る種類のものであれば治し、完全には治らない場合には可能なコミュニケーション手段を見つけて出して、周囲の人々と折り合って生きていくための助力をすることが、言語障害の臨床家の中心的役割であろう。もちろん、共通のコミュニケーション手段を求めて周囲の人々が歩み寄っていくように、その方法を助言するのも言語障害の臨床家の果たすべき役割の重要な部分である。

言語障害の臨床と研究に携わる専門家のことを米国で

は、*Speech and language pathologist* と言っており、博士号を取得していることが一般化しているようであるが、その資格の認定は学会で行っている。国家資格にこだわると言語障害を持つ人々のニーズに応じる十分な質のものにすることが困難なために学会認定になったと聞く。日本では臨床心理士について同様の認定法がスタートした。言語障害の臨床家についてもかくあらねばならぬと思う。

言語という高次の精神活動に関わる仕事を自分でも大切にしつつ、この仕事が社会的にも尊重されることを望む。

自分の仕事について書くことは、初心に帰ることを意味する、と、このシリーズを執筆しつつ再認識した。書くチャンスを与えて下さった恩師の本田和子先生に心から感謝を捧げる。

(聖マリア病院言語治療科)